恋ぞつまりて禍と成らしむ

※体験版※

鬼殺隊の中には男色の趣味を持った者も多くいるから、炭治郎には気を付けさせなければいけないな、と思いながら、坂下は小川に差し掛かった。
すると、雑務を終えた炭治郎が地面に座り込んで、同じく横に並んで座っている人物と楽しそうに会話をしている。

（水柱・・・！）

坂下は義勇の姿を確認してゾッとした。柱はみんな厳しいし、異次元に強いし、尊敬に値する最高位の隊士だ。
しかも、水柱は特に顔に表情が無く、何を考えているのかわからない、掴みどころがない柱だ。だが、色男だから、それが余計に女子隊士たちに人気があるのが気に喰わない。しかし後ろ姿を見ても、鍛えられた身体の逞しさを感じ、無造作に結ばれた長髪には男の色香を感じる。上背もあるし、姿も良い。自分では何を比べても敵わない相手だ。
そんな鉄面皮の水柱に、炭治郎は「親戚のお兄さん」のように気軽に話しかけ、楽しそうに会話をしている。会話と言ってもたまに水柱が頷く程度だが、それでも奇跡を見たような気分だ。

「義勇さんは鮭がお好きなんですよね！今度水屋敷に行ったとき、大根と一緒に持って行きます！」

義勇さん？あの水柱を下の名前で軽々しく呼び、さらに水屋敷へ押しかけると言う。
坂下は飛んでもないことを聞いてしまって、いたたまれない気持ちになったが、そう呼ばれた水柱に変化はない。
さらに水柱は何かを炭治郎に話しかけている。声が小さいからここまでは聞こえてこないが、話が終わると炭治郎が満面の笑みで「ハイ！」と元気よく叫んだので、激励の言葉でも貰ったのだろう。
さらに信じられないことに、水柱は炭治郎の頭を撫でていた。
撫でられる炭治郎は、頭を差し出して気持ちよさそうに目をつぶっている。

（可愛いな）

嬉しそうな笑顔を浮かべて撫でられている炭治郎に一瞬見惚れるが、そうじゃない。
あの人嫌いで知られる水柱が炭治郎と会話していること自体が奇跡だが、頭を撫でるなど、天変地異の前触れかと疑うような所業だ。
坂下は二人のやりとりを見なかったことにして戻ろうとすると、背を向けた途端背後から炭治郎に声を掛けられた。
「あれ？坂下さん！どうしたんですか？」

（やめろー、今呼ばないでくれ、水柱相手に俺どうしたらいいんだよ！）

涙が出そうになりながら坂下は振り返ったが、炭治郎の隣には義勇はもう存在していなかった。
さっきまでのことは幻か？と思うほど綺麗に消えている。

「炭治郎、あの・・・交代で寝ることになったんだ・・・だからお前も戻ってこい・・・」

「はい、わかりました！伝令ありがとうございます！」

礼儀正しく九十度に腰を折って礼を言うと、炭治郎は心なしか嬉しそうに洗い終わったおひつを乾いた手拭いで拭いている。

「なあ、あの、さっき・・・・」

聞いてはいけないと思いながら、坂下は好奇心が勝って炭治郎に尋ねた。

「さっき、水柱がいたような気がしたんだけれど・・・」

すると炭治郎は坂下の杞憂を吹き飛ばす快活な声で言った。

「ああ！義勇さんですね！俺と同じ育手の下で学んだ、兄弟子・・・って言っていいのかな？そんな関係です！」

いくら兄弟子であっても下の名前呼びはしないだろう、しかも相手は柱だ。そう色々と疑問に思いながらも、坂下はようやく次の言葉を繰り出した。

「・・・あの人、怖くね？」

「どうしてですか？確かにあまり感情を表に出さないし、無口ですけれど優しい人ですよ！」

そう言う炭治郎の瞳はキラキラと眩しく、坂下はその熱視線で心の邪推を消化される思いだった。
皆から畏怖される柱でさえ虜にする人好きの良さは、ここまでいくと天性の素質だ。殺伐とした鬼殺隊でもこれだけ可愛がられるのだから、普通の生活を送っていればさぞやもてはやされただろう。男にも女にも。
そうだ、男にもモテるのだ。

いくら兄弟子とは言え、頭を撫でたりするだろうか？座っている距離もだいぶ近かったし、人を寄せ付けない威圧を持つ水柱が、炭治郎には胸襟を開いているらしい。もしかしてこの二人はやんごとなき関係なのではないだろうか。
そこまで考えが至ったが、考え込んだ自分を見つめている炭治郎の曇りのない赫い瞳を見て、邪な考えは払拭された。

「坂下さんも、次に会ったら話しかけてみてくださいね！」

「話しかけって・・・お前、相手は柱だぞ・・・」

「でも、義勇さんはいい人ですよ！」

炭治郎の謎理論を押し付けられ坂下は困惑したが、炭治郎が柱までもタラし込む人柄の持ち主だということは分かった。

「今は宇田が寝てるけど、次はまだ決まってないんだ。炭治郎、次に寝るか？」

話を変えて坂下は炭治郎に本題を振ると、炭治郎は首を横に振った。

「いいえ！俺は一番若輩ですし、疲れてません。最後で良いです！炊事道具を返してきたら、周辺の様子を見てきます！」

確かに炭治郎の様子を見ると疲れている風はなく、元気が溢れている感じだ。クリっとした目は純粋で、やはり可愛い。無邪気に笑う表情だが、こんな炭治郎でも艶事となると変貌するのだろうか。つい想像しそうになってしまい、坂下は唾を飲み込んで目を逸らす。

「無理すんなよ、なんだったらどっかで適当に寝とけ」

と言い置き、坂下はその場から離れようとした。

「坂下さんこそ、何か思い悩んでるんですか？そんな匂いがしますよ？」

炭治郎の鼻の良さは聞いていたが、感情まで読み取れるという噂は本当だったらしい。驚嘆しながら坂下は炭治郎に振り返り、適当に言い繕った。

「ああ・・・大したことじゃねえよ。個人的な悩みだから、気にしないでくれ」

～中略～

自分の生殺与奪を持つ鬼に拘束され、恐怖の時間だというのに、炭治郎の雛先は隆々と反応してしまっている。

（な、なんで？こ、この液体のせいか？なんだか、身体が敏感に・・・！）

『ようやく気付いてきたか？この液体には強烈な催淫作用があってな。果てるときの快感もひとしおだぞ・・・？』

直接肌に塗り込められる媚薬粘液が肌に浸透して、炭治郎の身体を否応なく発情させてゆく。

（んんっ！いや、嫌だっ・・・！）

口に挿り込んだ触手が炭治郎の口腔を激しく抽挿し、まるで尺八を強要されているような感覚に陥らされる。炭治郎は義勇しか知らないが、義勇に喜んでもらうために知る範囲で性技を覚えており、それが身体を高める仇になってしまったようだ。

口からどんどん甘い液体を飲み込まされ、ぬるぬるとした感触の触手が裸の体中を撫で回しまくる。
炭治郎の身体はいつしか強烈に発情していた。
鬼の触手の感触にゾクゾクとした感覚を覚えるが、開脚をさせられて目立って反応している雛先には一切触れてこない意地の悪さが、この鬼の陰湿さを物語っている。
炭治郎の身体に無数に巻き付いた触手は、炭治郎の首筋や鎖骨、脇腹や肩口、下腹や背中、臀部や足裏など、余すところなく一斉に責めてくる。媚薬を塗り込められながらの激しい愛撫に、精神力の強い炭治郎も淫に流されかかってしまうほどだ。

（うっ・・・ぞくぞくする、反応が抑えられない、こんなヤツに触られて・・・！）

『ふふ、ここが男どもが夢想した乳頭か。実に愛い。黒ずむまで可愛がってやろうかの』

先端の丸い触手が胸の桜色に密着し、ぬるぬると捏ね回し始める。
一方は円を描くようにして感じさせ、一方は上下に素早く摩擦して感じさせてくる。
義勇との閨の時もここを何度も触れられたが、あまり長時間愛撫されるとその先に炭治郎の知らない未知の感触へ辿り着きそうで、それが怖くてさり気なく避けていた。

「ん、んんっ！んっ！んっ！」

催淫液で十分高まった炭治郎の身体に、最も感じる性感帯の一部への責めは強烈すぎる。
ツンツンと軽く突かれただけで背中が跳ね上がる桜色に、触手の愛撫は容赦なかった。初めて感じる胸の強烈な快感に炭治郎の思考は停止し、口に流し込まれる甘い液体を嚥下しながら鼻で必死に息を吐く。その息苦しささえ、快感に変わってしまう。
まるで無数の手に愛撫されているような感覚に、炭治郎の正気が揺らいで行く。

「ふっ、ふっ、んんっ・・・んっ、んぐぅう・・・！」

ほとんど全裸の身体中を余すことなく触手で撫で回され、とどめの強烈な媚薬で炭治郎の性感は最高潮まで高まっていた。
しかし、ここまで責められていながら、未だに満足しない部位がある。左右に大きく広げられ、中心でそそり立つ雛先だけには一切触れてこない。雛先からは刺激が欲しくて先走りの淫液がとめどなく溢れ、足の付け根で触手がそれを掬うが、その感覚さえ甘い感触だった。

「ふっ・・・ん、ぐっ・・・！」

身体が淫蕩に浸りかけ、炭治郎の赫い瞳が蕩けようとする。そして触手は追い打ちのように突き出された格好の雛先に襲い掛かり始めた。
すぐに撫で回すようなことはせずに、まずは触手の先端で何度も突き回してくる。

「んぐぐぐっ！んぐっ！んん――――――！」

それだけでも焦らしに焦らされた部位への快感が爆発を起こす。さながら稲妻が下半身を乱反射しているような感覚で、思考が停止するほど強烈な物だったが、責めは当然これで終わらない。
突き回す最中でもそのぬるつく身を雛先の表面に滑らせて、長く快感を感じさせてくる。突く触手と撫でる触手の数が半分に分かれたあたりで、炭治郎は耐えられず、射精絶頂を迎えた。

「んんん――――――！」

鬼に絶頂を迎えさせられた屈辱に、義勇以外にあられもない姿を見せてしまった背徳の感情。その全ては白く染まり、炭治郎は深い絶頂を思う存分貪ぼって、快感に惑溺した。

「んっ・・・ぐ、ふぅ、ふぅ、ふっ・・・んん・・・」

この世にこれほどの愉悦があるのかと思わせるほど強烈な射精絶頂に、一瞬意識が空白になってしまう。しかし、媚薬まみれにされた若い貪欲な身体は、一度与えられた快楽をまだ味わいたくて勝手に発情してしまう。

（こ、こんな奴に果てさせられるなんて、屈辱なのに・・・！どうしてまだ身体が熱いんだ！）

炭治郎が吐き出した精液を触手たちが舐め取り、新たな催淫液として炭治郎の身体に塗り込めてくる。

「くっ・・・ふ・・・」

炭治郎の無垢な赫い瞳が潤み、眉は垂れ下がり、快楽に浸った表情に変わる。触手で再び滾った雛先を軽くペチペチと叩かれ、それだけで絶頂しそうな刺激に炭治郎の腰がビクビクと痙攣する。

「んんっ！んっ！んんんっ！」

『ははは・・・あっけないものだな。しかし男子（おのこ）と思うて残念に思っていたが、なかなかの淫乱ぶり・・・他の若い者たちの慰みになるわけだ』

（な、慰みになんて、なってない・・・！）

反論したいが炭治郎はずっと口に触手を突き挿れられていて、くぐもった呻き声しか上げることができない。

『これが男たちの欲をそそっていた尻か。ふふ、可愛いものだ。背中は美しいな。可愛がってやろう』

空中に持ち上げられて全身無防備になっている炭治郎の身体、特に背中に触手のぬるぬるが集中する。

「んんんっ！んんっ！んんん――――――！」

媚薬のせいか、もともと感じやすいせいか、何本もの手で撫で回されるような感覚に炭治郎は当惑しながらも快感を覚えてしまう。

ゾクゾクとせり上がる愉悦が自分の意思では制御できず、これまで味わったことのない圧倒的な快楽に頭が真っ白になってしまう。

当然無防備な上半身も触手に責めの的にされていて、桜色は吸盤を生えさせた触手が強く吸い付いて離そうとしない。強く引っ張られるだけで涎が出そうな快感が走るが、粘液の効果でぬるつき、キュポ、と離れる瞬間は稲妻が落ちたかのような激感が走破する。

～中略～

きゅぽ、と音をさせて雛先を先端からずぶずぶと飲み込み、催淫液を流しながら炭治郎の身体の一部を飲み込んでゆく。
全方向から刺激される感覚に、先端が吸い上げられる快感が折り重なって、腰が蕩けるほどの愉悦が訪れ、我慢することもできず炭治郎は射精絶頂を迎えてしまう。

「はぁ、ああっ！あっ！あっ、あっ、あぁあああー・・・っ」

通常の射精と違って、触手の愛撫を受けての射精絶頂は深い。絶頂後にしばらく頭を妄とさせ、はあはあと喘いでいた炭治郎だったが、正気を取り戻してぐっと奥歯を噛んだ。しかし、責めは終わらない。筒触手はそのまま何度も上下の動きを繰り返し、炭治郎の精液を三回分搾り取った。
快楽に打ちのめされて虫の息になりつつあったが、必死に意識を保とうと奮起する。

「はぁはぁ・・・うっぐ・・・こんな、変な、液さえなければ・・・っ！」

はぁはぁと荒い息を吐きながら、炭治郎は途切れ途切れで必死に言葉を口にする。その途端、胸の桜色をキュウと抓まれ、また快感に背中を仰け反らせる。

あああ、と喘ぐ炭治郎に、鬼は言った。

『なんだ、まだ催淫液を使われていると思っていたのか？ふ、はははははっ！』

耳障りな笑い声に、炭治郎は悔しさにギリ、と奥歯を噛み締める。

「くそっ・・・！笑うなっ！」

『いやいや、もうお前には催淫液など用いておらぬぞ？とっくに潤滑液だけに切り替え、お前が勝手に快感を感じているだけだが？』

「なっ・・・！」

『つまり、お前は催淫液がなくともそれと同等に身体で愉悦を貪ることができる淫乱ということだ！はは・・・純情そうなツラをしおって、隠れた才があったのう！』

鬼に衝撃の事実を突きつけられ、炭治郎は狼狽する。

（そ、そんな、じゃあ、俺が今感じている快感は、一時のものではなくて・・・！）

自分の素の身体が快楽を覚えていたのだと理解すると、炭治郎は当惑し、頭の中がない交ぜになってしまう。

『良いではないか、淫乱というのはなかなかなろうと思って成れるものではないぞ？お主は素質があったということだ。炭治郎』

「そ、そんなわけないっ・・・！」

必死に取り繕おうとする炭治郎だが、責める触手の数が倍に増え、肌全体を舐め回される感触を味わわされるとどうしようもなく甘い声が零れた。

「あふっ・・・！あ、あぁぁあっ！あぁ、や、やめろっ！くっ、あぁぁあ・・・っ！」

『ははは・・・これほど快楽で身悶えておるのに、まだ認めぬか？これはお主の身体そのものがこの悦楽を感じているのだ。淫乱と認め、快楽を受け入れれば、死ぬ間際まで幸福でいられるぞ？』

「だ、誰が・・・！殺されて、たまるかっ・・・！あっ、あっ、あぁぁぁあっ！」

啖呵を切る炭治郎だったが、雛先の筒触手が回転を始めると激しい摩擦で激悦が生じ、あっけなく射精絶頂を迎えてしまう。その快楽は、魂を削がれているかのように強烈だった。

（そんな、俺の身体・・・なにもされてないのに、こんなに快楽を感じてしまうなんて・・・信じたくない・・・！）

消沈の次に浮かんだのは、ぼさぼさの髪をひとくくりにした男の後ろ姿だった。

（義勇さん、ごめんなさい、俺、あなた以外でも、こんなに感じてしまって・・・！）

泣き出したくなるのを必死に堪えながら、炭治郎は唇を引き結ぶ。しかし、身体を舐め回す触手の快感が炭治郎の口が閉じるのを許さなかった。

「うあっ！あっ！あっ！も、もう止めろ、あぁぁっ！」

両胸は口触手で刺激され、雛先は筒触手で責め立てられ、胎内は珠の連なった触手が責め上げている。

身体中が快感にまみれて、炭治郎はただ一方的に与えられる快感に汗と涙を流し、妖艶に乱れまくった。
炭治郎が一際深い絶頂に突き飛ばされ気を失いかけたところで、また鬼の責め手が変わる。今度は繊毛が先端についた枝がいくつも伸びてきて、汗まみれになっている瑞々しい身体を優しく愛撫し始めた。

「んっ、んん・・・」

これまで激しい快楽しか与えられなかった炭治郎に、撫で回すような愛撫は正直心地が良い。絶頂を感じさせられすぎて体力が消耗しているときにこの愛撫は心地よかった。
上から大の字で吊られ、痛みが無いように両手や腰に太い蛇じみた触手が巻き付き、炭治郎にはあくまで苦痛は与えないらしい。全身無防備になっているその裸の身体に、十を超える先端繊毛触手が一斉に肌の上を滑り始める。

「んふっ・・・ん・・・んんっ・・・あっ・・・」

強制的に上げさせられるものとは違い、純粋な快楽に耽溺する、炭治郎のそのため息はぞくぞくするほど色っぽい。
敏感になった身体を不規則に撫で回され、身体中の性感がより鋭敏になってしまう。

無数の繊毛触手は炭治郎の背中のくぼみをなぞり、内腿を撫で回し、足指を優しく擦って、首筋を撫で上げる。
うなじを愛撫されて背筋にゾクゾクと愉悦が走り、炭治郎は無意識に背中を反らせて善がり声を上げてしまう。

「あっ・・・！あ、あぁっ・・・！」

感じやすい内腿や鼠径部を撫で擦られ炭治郎の中に淫熱が蓄積し、胸を撫でる触手が桜色に触れた瞬間、強く刺激を感じて身体を小さく痙攣させてしまった。

『ふはは、好いか？好いか？』

炭治郎の甘やかな反応を眺めているらしい鬼は、囃し立てるように嗤う。

「くっ・・・気持ち悪いだけだっ・・・！」

口では否定するものの、身体中を這い回る触手の繊毛は我慢できないほど気持ちが良い。これまで強い刺激で責められていた分、優しくねっとりとした責めは炭治郎の身体をほぐし、性的快感をさらに受け入れやすくしてしまう。
これまで散々淫責めをされ昂った身体に、この刺激は快感以外の何物も伝えてこない。普段ならくすぐったいだけの責めに、炭治郎の身体は勝手に淫欲を孕んで欲情の汗を流し始めていた。

「はぁ、はぁ・・・はぁ・・・」

『息が乱れておるぞ？気持ちよいのか？感じるのか？』

「そ、そんなことはない！」

虚勢を張る炭治郎の身体はすでに触手の愛撫を性的な快感として受け止め、触れられる度に甘やかな刺激が走る。
特に開かれた両足の間を何度も行き来する触手は、下腹や内腿、臀部や鼠径部を撫で上げるが、肝腎の中心には触れてこない。
炭治郎の雛先は触れて欲しくて反応をはじめ、腰が勝手に揺らめいてしまっていた。

「んんっ・・・！」

上半身にビリリと刺激が走り、触手が胸の桜色を擦ったのだと知覚する。こんな場所がここまで敏感になってしまっている事実に炭治郎は驚いた。

（そんな、こんな場所が・・・）

衝撃を受ける炭治郎に構わず触手は再び桜色を撫で回してくる。四肢が拘束されている炭治郎は抵抗することができない。

「うあっ！あっ・・・！や、やめろ、そこは駄目、んんっ・・・！」

繊毛が通過する度にゾクゾクと愉悦が湧き上がり、背中がヒクヒクと痙攣してしまう。炭治郎の肌も徐々に汗ばみ、触れる繊毛に妖しい感覚を覚えてしまう。

「ふあっ・・・くっ、何のつもりだ、やめろ・・・っ！」

～中略～

「あっ・・・く、くすぐったいです・・・！」

背中を撫でている隊士の手を掴もうと片手で払ったが、手はすぐに元の位置に戻り、さらに背中から下部へと移動してゆく。
明らかに双丘へと向かう手の動きに炭治郎は冷や汗を感じ、まさか、と思ったが、やはり手は自分の臀部を撫で回し始めた。

「わああっ！ど、どこを触ってるんですが！男の尻なんて！なんで触るんですか！」

炭治郎の尻を撫でたり揉んだり好き放題にしている宇田は、だらしない笑顔でその若い肌の感触を愉しんでいる。

「思ったより柔らかいな・・・鍛えてるからカチカチかと思ったけれど、柔らかい・・・」

「うう、しっかりしてください、皆、わっ！」

体力を使い切った炭治郎の身体を、一人の隊士が腋に腕を通して持ち上げて膝立ちにさせてくる。
炭治郎の全裸が皆の目に晒されて、炭治郎は激しい羞恥を感じた。
男同士で羞恥も何もないだろうが、先ほど鬼に穢されていた自分を見られたことが炭治郎の羞恥心を最上に高めている。快楽でほんのり朱づいた肌を、反応している身体を見られたくなどない。

「んっ、ちょっ・・・やめて、ください・・・！」

炭治郎の蕩けた顔を見て坂下は腑抜けのように近寄り、顎を取って強引に口づけしてきた。

「んんんっ！ぷは、や、やめ、なんで・・・！」

一瞬の出来事に頭が白くなったが、炭治郎はすぐに我に返り首を振って口づけから逃れた。が、今度は容赦ない力で頭を顎を掴まれて深く口づけされてしまう。

（な、なんで・・・そんな、嫌だ、義勇さん以外の人と接吻なんて、嫌だ・・・！）

炭治郎は必死になって口を閉じようとするが、雛先に誰かが触れる感覚が伝わり、驚愕でつい口が緩んでしまう。

「なにしてっ・・・！んぐぅう・・・っ」

強く口づけられ、口内に舌を入れられて遠慮なく口の中を掻き回される。触手で散々、口でも快楽を感じると刷り込まれた身体は、この感覚で勝手に熱くなり、隊士たちの触れてくる手を鋭敏に感じてしまう。

（ああっ・・・義勇さん、ごめんなさい・・・！）

「んんっ！んっ！はぁ、や、やめてくださ・・・どこ触ってるんですかっ！わああっ！」

炭治郎の反応した雛先を弄んでいる隊士が、根元から先端にかけてゆっくり擦りながら呟く。

「竈門、まだ下生えも薄いんだな・・・でもこんな赤くなってしまって、よっぽど感じやすいんだな」

井上の声が下から聞こえたと思うと、先端を酷く熱く、ぬめる何かが包み込んだ。

「ふぁぁっ・・・！」

あまりの快感に炭治郎の腰が引くが、二人の隊士に戻されて身じろぐことすら許されない。

（い、一体何、して・・・）

口づけを振り切って下方を見ると、あの冷たい印象の井上が炭治郎に尺八をしていた。

（そ、そんな、どうして？井上さんがこんなことするなんてありえない、おかしい！）

混乱する炭治郎だったが、下半身に感じている熱は本物だ。義勇にもされたことが無い性技を使われ、悔しさと背徳感が襲うが、身体は嘘がつけずゾクゾクと愉悦が腰を走り回り、両足に力が入ってしまう。

「感じてるんだ・・・お袋、ケツがきゅって動いたぜ。可愛いなあ・・・」

だらしない宇田の声が聞こえてきて炭治郎は後ろを振り返ろうとしたが、自分を羽交い絞めにしている山本と目が合った。

「や、山本さん、降ろしてくださ・・・」

「お袋、近くで見るとほんと可愛いなあ・・・男なのがほんともったいないぜ・・・」

そう言って炭治郎の耳朶に舌を這わせて、熱い吐息を吹きかけてくる。

（みんな血鬼術でおかしくなってる！なんとか抜け出して、鬼の本体を探さないと・・・！）

体術に優れた炭治郎だから、四人に囲まれたところで抜け出せないことはない。しかし今は身体の中を渦巻き続ける淫熱と、身体中で弾ける触られる快感に力が入らず、隊士たちにされるがままになってしまう。これまで散々媚薬で責められて絶頂の快楽を打ち込まれた炭治郎の若い身体は、未だに疼きが治まらず、他人に手指で触れられるだけでゾクゾクと妖しい感覚が肌を走る。

「やめてください！みんな、正気に戻ってください！んっ！あ、そこはっ・・・！」

「炭治郎、乳首綺麗な色だな。硬くなってるけれど、触ると・・・感じる？」

体中にまどろっこしい愛撫をされて欲求不満の発情状態にある炭治郎に、最も感じる性感帯の一部への愛撫は強烈な快感となる。触手で散々弄り回されて、触れられていない今でもジンジンとしているというのに、焦らされた桜色に触れられたら間違いなくあの妖しい感覚がせり上がってくる。

「か、感じません！だから触らないで・・・んぐっ、あ、あぁっ・・・・！」

坂下は炭治郎の懇願を無視して桜色に指を乗せ、ゆっくり円を描くようにして撫でてくる。

「ふあぁっ！あっ！や、やめて・・・！」

触手の力強い愛撫と違って、柔らかい触り方は炭治郎の官能と焦燥を刺激する。さらに胸の快感が、尺八をされている雛先に伝わって両方の快感が高まってしまう。

「炭治郎、ケツからぬるぬるの液が垂れてるぜ・・・ここに何を入れられたんだよ・・・」

臀部の感触を味わっていた宇田が欲に蕩け切った声で言う。散々触手の媚薬粘液を注入されて、腹圧で逆流してきたのだ。

自分の臀部から零れる物を見られて、炭治郎は排出を見られているかのような強烈な羞恥心が込み上げ、なんとか両腋の拘束を解こうとしたが、さすが鬼殺隊として鍛えられているだけあって、ほぼ体力が尽きた炭治郎では振り解くことができない。

「あぁぁあっ！な、なにを・・・！そんなところ、汚いっ・・・！」

垂れる媚薬液を指に絡ませ、宇田が炭治郎の秘孔に指を一本突き挿れてきた。その瞬間、背骨から脳髄にかけて甘美な愉悦が走破し、炭治郎の身体は淫らに揺れた。

「わあ・・・簡単にケツに指が挿っちまったよ・・・これなら、まだまだいけそうだな」

不穏な言葉を耳にしながら炭治郎は必死に身体を動かして抵抗しようとするが、隊士たちも体術に優れている。炭治郎の動きは全て相殺され、力ない炭治郎では相手にならない。

「も、もうやめてください・・・！あっ、うああっ！そ、そこだめ！もうやめて！我慢できない、ですっ・・・！」

～中略～

「あっ・・・かはっ・・・！」

炭治郎の胎を犯していた隊士がようやく炭治郎が感じる部分を見つけたと、深い笑みを浮かべる。

「炭治郎、ここが気持ちいいんだな？中の様子が一変したぞ。なるほど、ここか、ほら、ほら・・・」

前立腺の裏を剛直で捏ね回し、擦り回されて、快楽の奔流が止まらない。ぞくっ、ぞくっ、と涎が垂れそうな愉悦が下半身から脊髄を伝って脳天まで走り、炭治郎は快楽の事だけしか考えられなくなる。

「ふぁぁあっ！あっ！あああっ！あっ！や、いや、そこ、んんっ！あぁぁあああっ！」

可憐な声で快楽を叫ぶ炭治郎の脳裏に、また義勇の姿が浮かぶ。

（義勇さん以外で気持ちよくなんてなりたくない・・・！）

炭治郎は改めて自分が義勇に不貞を働いてしまっているのだと感じ、涙が出そうな切なさに取り込まれる。せめて快楽を示す反応は返すまいと考えるが、穿たれる度に腰から後頭部まで怖気立つほどの愉悦が湧き上がり、腰が勝手にカクカクと反応してしまう。身体の快感は誤魔化しようがなく、ただ愉悦に乱れて瑞々しく若い身体を妖艶にくねらせるだけだ。

「ほらほらお袋、こっちもちゃんと擦ってくれよ？」

「あっ、俺出そう・・・お袋にされてると思っちまうと、なんか・・・出る！」

炭治郎の両手を使って手淫をさせていた隊士たちがそれぞれ叫び、左の隊士の炭治郎の手を動かす動きが急激に速くなって、手の皮が剥けそうなほどだ、とその激しさに炭治郎が驚いた直後、その剛直の先端から白液が大量に噴き上がり、炭治郎の鎖骨から胸、みぞおちを穢した。

（せ、精液を掛けられた・・・！）

胎の中だけでは無く身体の表層まで穢されてしまったことに炭治郎は悲壮感を覚えた。もう、こんな身体、義勇さんに触れてもらう資格などない。穢いこの身体をあの義勇さんに触らせるなどできるはずがない。

そう絶望していたところへ続けて右からも精液が噴き上がって上半身に精液を上塗りさせられ、炭治郎の絶望は深くなる。

「うっ・・・うぅ・・・」

涙が次々と溢れてくるが、まだ隊士たちに両手を握られているので自由が利かず、拭うこともできない。精液にまみれた炭治郎の姿は、醸し出された艶っぽく淫靡な雰囲気で、隊士たちの情欲を増長させていった。炭治郎に向ける視線がさらに熱っぽくなり、若い盛りの隊士たちはすぐに身体を昂らせる。

「はぁぁ・・・お袋色っぽい・・・なんだか、もっと責めてやりたくなるなあ・・・」

「ああ、気持ちよくさせたい・・・」

欲を吐き出した隊士たちだったが、炭治郎の艶姿を見て再び激しく欲情し、口の端から涎でも垂らさんばかりに発情している。血鬼術のせいで理性のタガが外れ、炭治郎に向けた欲望だけが暴走し始めているのだろう。
当の炭治郎は胎の好い部分をしつこく捏ね回されて何度も軽い絶頂を迎え体力を消耗し、自分を見る隊士たちの欲望の眼差しには気づけない。

（ううっ、は、はやく終われ、もう果てたくないっ・・・！あぁ、そこはだめ、感じるっ・・・！）

コツがわかってきたらしく炭治郎を犯す隊士の腰遣いが手慣れたものになり、炭治郎に快感の声を上げさせる。バツバツと腰を打ち付け、揺れる下半身に合わせて炭治郎が甘い声で嬌声を上げ始めた。

「あっあっあっあっあっ、あっ、あぁっ、あっ！あっぁあああっ！あっ！」

ごり、と一点を抉られた瞬間、これまで軽い快感で蓄積されてきた悦の山が突き崩され、最上の絶頂が胎に訪れる。

「いや、嫌だ、嫌だあぁ・・・！止めて、止めてください、はぁ、あぁぁっ！も、もう俺、我慢が、でき、ま、せんっ・・・！」

「いいじゃないか、胎の具合もどんどん好くなってきて、もう俺も我慢できない・・・出すぞ、炭治郎！」

ツンと鼻の奥が痺れる感覚がした直後、悦の山が崩されて炭治郎は深すぎる絶頂へと達した。

「あぁあああああ――――――――！」

その直後、胎の中に熱い奔流を流されるのを感じ、炭治郎は身体は熱くとも、心は一瞬で冷えた。

（か、身体の中に、まさか精を出された？まさか、そんな・・・！）

信じたくない事実に、炭治郎は激悦に陶酔する身体とは裏腹に、冷静になった思考で最悪の事態を想像する。

身体の表層だけでなく身体の中まで穢されるなど、もうそれこそ義勇に合わせる顔が無い。自分の身体は完全に汚れてしまった。

「ふぁ、あぁ、い、嫌だ・・・あぁぁ・・・っ、あっ・・・はぁ、あっ・・・あぁぁあ・・・」

深い絶頂の余韻で腰をヒクつかせ、背中を痙攣させながら炭治郎は言葉とは裏腹に遊女裸足の甘い艶声で可愛らしい抵抗の声を上げる。それがますます隊士たちの獣欲を刺激するとも知らず、炭治郎は喘ぎながら、自由にはなったが全く力の入っていない手で自分の中に挿っている隊士の腰を押す。

「お袋、情れないな・・・身体の中は、まるで俺を好きかのように動いてくれてたのに・・・」

～中略～

「はぁ、はぁ、だ、だめ・・・い、今触らないでっ・・・感じ、すぎ、てっ・・・・！」

先端をキュ、と抓まれ、絶頂に等しい激悦が上半身を走る。

「あぁぁぁぁあっ！」

「一回極めたら果てやすくなるのか？すげえ反応・・・」

「ほんと、こんないい反応されたらこっちも嬉しくなるぜ」

絶頂したばかりで極めて敏感になっている桜色を左右同時に責められ、身体の痙攣が止まらない。
一度果てた桜色は絶頂癖がついてしまい、少し激しく責められただけで次の絶頂がすぐ訪れてしまう。
先端を指で素早く擦られ、抓んで擦り回され、円を描くように捏ね回され、炭治郎は何度も胸で絶頂を迎えてしまった。

「あぁぁぁっ！あっ！ま、またっ・・・！も・・・やめっ・・・・！」

爪で連続してカリカリと刺激され続け、炭治郎は絶頂に舞い上げられる。射精絶頂と違って果てても波がすぐに引かず、快楽が残留している間に刺激されるとその時点からまた絶頂へと放り上げられてしまうのだ。

「はっ・・・は・・・も、いや・・・だ・・・」

はあはあと炭治郎が泣き声で訴えるが、隊士たちには逆効果だ。

「ほんと達しやすいなあ。お袋がこんなに淫乱だったなんて知らなかったよ」

「っ・・・、ち、違う、鬼の、鬼血術でっ・・・！」

炭治郎が否定の言葉を吐こうとすると、左胸に唇を付けられて舌で舐め回された。熱くぬるぬるとした感触はこれまでの指の感触とは異なり、炭治郎は強烈な快感として受け取ってしまう。

「あぁぁあああっ！そ、それだめっ・・・！」

「なんだ、舐められるのが好きか？お袋」

するともう片方を責めていた隊士も同じように桜色に口づけし、舌で突起を舐め回してくる。

「んんん――――――！」

これまでとは異なった刺激と熱さに炭治郎は一気に絶頂寸前まで追い上げられてしまう。舌でぐるぐると突起を舐め回され、時折歯を立てられるとその瞬間の強刺激にビク、と炭治郎の身体が跳ね上がる。

「なんだ、炭治郎は舐められるのが好きか。それは知らなかったな・・・」

雛先を責めていた隊士が根元からくびれまでを手で扱きながら、先端を口に咥えて舌で愛撫を仕掛けてきた。

「ひあっぁぁあああっ！ああっ！あっ！だ、だめ、もうだめ、あっ、あっあっあっ！」

上半身と下半身の愛撫に追い詰められ、炭治郎は迫る強烈な絶頂に泣き声のような艶声を上げる。

「んんっ、や、やめて、くださ、舐めるの、だめ・・・っ」

「なんだ舐められる方が感じるのか？淫乱じみてるな、お袋・・・」

「ん、あ、ち、違、あぁ、あ、あ、あああぁっ！」

指で触れられるのと違い、舌の熱さと唾液のぬめりが加わり、炭治郎はさらに強烈な愉悦を感じてしまう。

「いいぜ、どんどん締まりが良くなってくる・・・痛いぐらいだ、俺はもう出すぞ・・・」

炭治郎を犯している隊士が腰の動きをさらに速め、その身体を小刻みに上下させて胎内を容赦なく抉り擦る。

「うっ！あっ！あぁぁっ！あっ！ふあぁああっ！あっ！あっ！あっあっあっあっ！はぁぁああっ！」

身体中のどこにも快楽が通り、逃げ場を失くした快感が体内で渦巻いて、性感帯同士が共鳴してどんどん敏感になってしまう。

胸の快感は軽く絶頂しているような感覚がずっと続き、雛先は射精寸前なのをわかっていながら手加減されて焦れる愛撫をされているようだ。ざらつく舌で鈴口を上下に舐められ、炭治郎が腰を震わせて射精の予感を訴えるとすぐに愛撫を止めて、ぬくぬくと舌をゆっくり動かして裏筋やくびれを責める。

「んんっ！あ、あぁ・・・はぁ、あっ！あぁぁあっ！あ、あぁぁっ！」

「お袋、もう果てそうか？」

ほとんど絶頂に近い快感を覚えながら炭治郎は首を激しく横に振る。絶頂の瞬間を義勇以外の人間に見せるのは何度繰り返されても慣れはしない。

「ふふ、でも気持ちよさそうな声あげてるぜ・・・」

「んっ、あっ！き、きもち、よく、なっ・・・！あ、あぁぁっ！」

口を開けると快感で艶声が出て、まともに反抗の台詞を放つこともできない。

「よし、上も下も、全部同時に極めさせてやるぜ・・・」

～中略～

いつもの炭治郎らしくない、蚊の鳴くようなか細い声で言葉を絞り出した。

「どうしてだ？」

義勇の声は淡々としていて感情の揺らぎが感じられない。炭治郎は一瞬顔を上げて義勇の表情を窺ったが、その顔はいつもの冷徹で美しいものだった。

「み、見たんでしょ？義勇さん・・・」

「・・・」

「そ、その、俺が・・・先輩たちと・・・その・・・目合ってる・・・ところ・・・」

義勇は黙って首を縦に振った。その瞬間、炭治郎の喉元に熱いものが込み上げてくる。

「あ、あんな形でしたけれど・・・義勇さんに不義理を働いてしまって・・・その、俺の身体、穢くなってしまいました・・・」

すると義勇は炭治郎の胸座をいきなり掴み、眼前に引き寄せた。義勇の青い瞳の奥に、激しい怒りの炎が見える。それを目撃した炭治郎は、消え入りたいほどの後悔と申し訳なさで胸がはち切れそうだった。義勇はすぐに炭治郎から手を放し、再び正座に戻らせる。

「別に、気にしていない」

それならば先ほどから義勇から漂う激しい怒りの匂いはなんなのだろうか。もういっそ、打擲して怒鳴って、叩き出してくれたほうが炭治郎は気が楽だ。

「・・・しかし、言うべきことはある」

その言葉を聞いて炭治郎の胸がぎゅっと切なくなった。

「鬼が潜んでいるやもしれんのに、暗がりで休憩するなど愚の骨頂だな。お前はまだまだ考えが足りない」

「はい・・・そうですね・・・」

「無防備すぎる」

義勇から淡々と発せられる叱責の声に炭治郎は恐縮し続ける。その言葉よりも、義勇の身体からは非常な怒りの匂いが漂っており、炭治郎にとってはそちらの方が恐ろしかった。
義勇に向かって正座して俯いて大人しく叱責を受けている炭治郎だったが、ふいに月明かりが雲の加減で光の射す方向が変わった。
逆光だった義勇の顔が明瞭になり、炭治郎が顔を上げて表情を見た瞬間、その美麗な眉が強く吊り上げられた。

（叩かれる！）

炭治郎はそう思って一瞬身構えた。自分は愚かな真似をしでかしたのだ。義勇がいなければ五人とも助かっていない。兄弟子に世話をかけさせてしまった自分の不甲斐なさ、打擲ぐらいで済めば軽いことだ。
義勇さんの張り手は痛いだろうな、などと考えていると、いきなり肩を押されて背後の布団の上に倒され、上からのしかかられた。

「ぎ、義勇さん・・・」

息がかかるほど近くまで義勇の顔が迫っているが、見ているのは炭治郎の顔ではない。炭治郎の浴衣襟を掴み、右に開いてそこを凝視し、さらに左も開いて凝視する。なんの説明もなくいきなり両肩が開けた状態にされ、炭治郎は戸惑うばかりだ。

「・・・どうしたんですか？」

確かなのは、どんどん怒りの匂いが強くなっている事だ。自分を助け出したのは義勇だ。それならば、隊士たち相手に不義理をしてしまった自分を怒るのは当然だろう。

「・・・あいつら・・・」

地の底を這うような低く怖気立つ声に、炭治郎は心が冷える思いをした。
「あいつら」とは、自分を凌辱した隊士たちや鬼のことだろう。違う、義勇が思っているようなことではなく、彼らは鬼の血鬼術に掛けられて自分の意思とは違う行動をとらされていただけだ。
目の前の怒気に溢れた義勇を前に、炭治郎は勇気をもって生唾を飲み込みながら口を必死に開く。

「あっ・・・あの・・・義勇さん・・・あの人たちは、血鬼術に操られてて・・・」

「関係ない」

炭治郎の震える声を、義勇が語気を強めて遮った。炭治郎が俯くと、少し怒りの匂いが和らいだ。
義勇の掌が露になった炭治郎の肩口に触れ、するりと優しく撫でる。その感覚に、炭治郎は快感どころではなく、鳥肌立つ怯えを覚えた。
その直後荒々しく口づけをされた。まるで唇ごと食べてしまうような勢いで、炭治郎は突然の行為に驚いてしまう。
上に覆い被さられて、義勇の匂いが鼻孔に広がってくる。いつもは嬉しくて堪らない匂いなのに、今は胸が締め付けられる。
口づけされながら肩口に手を乗せられ、するすると炭治郎の肌の上を滑っている。
いつもは歓喜と期待の瞬間だが、今は昏い。

（俺、義勇さん以外の人に・・・身体を許してしまって・・・）

そう思えば思うほど泣けてくる。炭治郎は唇を引き結んで切なさに耐える。しかし、義勇の手が開けられた浴衣以上の奥まで迫ると、炭治郎は反射的に義勇を突き飛ばしてしまっていた。

「っ・・・・・・!」

驚いたのは両方だ。炭治郎は自分が反射的に仕出かしてしまったことに、義勇は拒絶されたことに一瞬目を開いて驚きの表情をとったが、すぐに冷えた目になった。

「あっ・・・うっ・・・す、すみませ・・・そんなつもりじゃ・・・」

必死に言い訳しようとする炭治郎だったが、仕出かしてしまったことは取り返しがつかない。頭は真っ白になって何の言葉も出てこない。

フイ、と義勇の感情の匂いが変わり、炭治郎が顔を上げた瞬間身体の上にのしかかられ、布団の上に押し倒された。そして肩まで開けていた浴衣の襟を掴んでさらに引き下ろし、炭治郎の上半身を露にさせる。薄明りの中でもわかる凌辱の染み跡は、泣きそうな顔の炭治郎と相まって哀れを誘うが、同時に猛烈なほど煽情的でもあった。

「これは俺がつけた跡だ」

～中略～

「もう黙れ」

必死に弁解しようとしたが、義勇に一言ピシャリと言われて炭治郎は黙るしかなかった。それでも怒っている匂いはしていないことに、少し安堵した。代わりに、むせ返るほどの雄の興奮の匂いが鼻孔に入ってくる。

見ると義勇の渾身は天をついて朱くなり、今にも弾けそうな様相だった。ほぐした臀部から指を抜き、炭治郎の身体に覆い被さり、炭治郎が自ら開いている両足の間へ少し渾身を擦らせる。

「ふぁ・・・」

（熱い、凄く熱い・・・）

炭治郎の雛先に義勇の渾身が擦られ、その熱さに炭治郎の官能が揺さぶられる。義勇も相応の悦を感じているらしく、先走りを放って粘液にまみれながらしばらく擦り合いが続く。

「んんっ・・・は、果てそうです・・・」

感じやすくなった炭治郎の身体が震えるのを見て義勇は腰を引き、炭治郎の双丘に両手をかけた。
その瞬間、炭治郎の胸の高鳴りが最高潮になる。

（義勇さんが、挿ってくる・・・）

それは乙女のような切ない期待と悦びだった。好きな相手と目合えるということが、どれだけ幸福な事なのか、炭治郎はさらに実感してその感情を噛み締める。
それと同時に、これが終わったらもう抱いてくれないかもしれない、という不安がよぎり、それは嫌だと本能が叫んだ。

「義勇さん、義勇さん・・・」

炭治郎が泣くような声で名を呼び潤んだ赫い目で義勇を見上げると、そのまま秘孔に渾身がゆっくりと挿入された。

秘孔が広がる違和感は何度抱かれても慣れないが、目覚める前まで散々酷使されていたことを思うとすんなり耐えられるものだった。なにより、あの義勇の身体が自分の中に挿って一つになれているのだから、炭治郎の悦びは大きい。

「んっ・・・ん、ぁ、ぁあ、あっ・・・・！」

「辛いか？」

先程から同じ質問ばかりしてくる義勇だったが、炭治郎はそのことに気づかずただ抱かれるのに精いっぱいで、首を横に振って答えた。

「進むぞ」

義勇に宣言されて、炭治郎は構えた。と言っても力を抜いてできるだけ身体の負担を減らさなければならない。これまで何度としたときのように腰の力を抜こうとする。しかし、力がうまく抜けたためしはなく、義勇はいつも極狭の洞内を進まなくてはならない。

「んっ・・・んんっ・・・・！」

炭治郎の苦し気な声が静かな部屋に木霊すが、義勇は動きをやめることはない。力を入れて、しかしゆっくりと炭治郎の胎へと挿ってゆく。

（凄く熱い・・・義勇さんの、魔羅が、俺の中に・・・）

それを強く思うと炭治郎は泣き出したいほど切なくなり、同時に歓喜に包まれ、瞳から涙が出そうになる。想い人と繋がるということはこれほどまでに幸せだったのかと改めてその感情を噛み締め、愛しい思いが全て義勇へと向けられる。
炭治郎は自分で抱えていた両膝を解いて義勇の肩に乗せると、自由になった両手で義勇の腕を握り締めて力を入れた。

「義勇さん・・・俺、嬉しいです・・・」

どくん、と胎の中の渾身が脈動したように感じたすぐ後、義勇が炭治郎の耳朶を軽く噛んできた。

「ふぁ・・・」

意外と耳も弱い炭治郎は、抱かれる身体になっている情欲のまま甘い声を上げる。

「俺もだ」

耳元で囁かれ、炭治郎は一瞬言葉の意味を掬いきれなかったが、直後理解し、また悦びで背中に回した両手に力を込めた。
鬼や隊士たちに凌辱されているときは無理矢理快感を感じさせられたが、どんな媚薬を使われても、今義勇と契っている瞬間が一番心地よい。

（やっぱり好きだ）

炭治郎は義勇の熱さを胎の中で感じながら愛おしさに涙ぐんでしまう。目を閉じると、それは粒になって炭治郎の頬を伝った。

「・・・辛いか？」

「あっ！い、いいえ！ほんと・・・嬉しい・・・です・・・！」

すると義勇は炭治郎の唇ごと食べてしまいそうな激しい勢いで口づけを仕掛けてきた。乱暴に舌を挿し入れ、口の中と言わず、唇や顎までを舐め回し、歯で甘く噛んでくる。

※続きは製品版でお楽しみください※